ベルクソン、科学と実証形而上学
――数理物理学との対話――
（要旨）

吉野斉志

本論はベルクソンの実証科学との関わりを通して彼の「実証形而上学」のあり方を解明する。ベルクソンは科学の捉え逃す本来的時間、「純粋持続」を哲学の探求対象としたが、他方で科学を学的正確さのモデルと見なす考えを維持し、哲学者たちの共同努力で漸進的に進歩する形而上学を主張した。また、彼は同時代の科学につねに目を配り、それと対決してきた。このような哲学はどのようなものなのかを解明するため、本論はベルクソン哲学の基本的な考えを明らかにしつつ、彼の議論が科学の問題と接する点をさまざまな具体例を通して見ていくことになる。

第一部はベルクソン哲学の基礎的性格を解明する。第一章ではまず、ベルクソンが根源的時間として見出した「純粋持続」の性格を明らかにした。純粋持続は計量不可能であって、線のような空間的表象で表現することはできない。また、そこでは過去・現在・未来という時制の分節も根源的ではない。数量化や空間的表象に応じる空間は「完了相」であるのに対して、純粋持続は「未完了相」の時間である。

第二章ではベルクソンが純粋持続の特性と見なした「自由」を検討した。ベルクソンは自由行為の「予見不可能」な性格を主張する。それが意味するのは、ラプラスのような人の主張する古典力学の計算可能性に対置された計算不可能性に他ならない。また、彼は物理学から完全に独立したところで自由の問題を扱っているわけでもなく、心理的領域と物理的領域との接点が存在する。人間が予見不可能な自由行為をなしうるということは、外から観察された身体は決定論的法則に従うのかどうかという問題を提起するからである。身体が決定論的であり、内的意志だけが自由だというのでは予見不可能な自由行為とは呼べまい。それゆえ、自由に行為する存在は外から観察しても計算可能な古典力学的系とは異なる振る舞いを示す、というある種の実証的予測が立てられる。

第三章では「同一性の観念」および「力動図式」に関するベルクソンの考えを検討し、人間の思考の働き方を解明することを目指した。ベルクソンの思想にあって、内的持続から空間的表象への表出は思考の、ひいては生命の本質的契機である。それゆえその出発点として、たとえ論理的な形で完全に表現可能と見なされる数学的思考の場合であっても、計算不可能な持続の働きは欠くことができない。こうしたベルクソンの立場をアンリ・ポアンカレやロジャー・ペンローズのような数学者たちの議論と比較することで、この問題系は人間的思考と計算機械の違い、ひいては AI という現代的問題系にも繋がっていることが明らかになる。彼らはいずれも数学的理解を論理に還元することを拒み、数学的思考であってもその根幹には直観的なものがあることを主張する。これはすなわち、思考し理解して行為する意識的存在と計算機械とでは、外的に観察できる振る舞いからして異なるということである。

第四章では、ベルクソンにとって数学的・科学的認識の基礎にあるとされる「空間」観念の解

明を行った。非ユークリッド幾何学を踏まえた空間観念の問い直しは当時の広く論じられていた話題であり、ユークリッド幾何学が唯一のものではないことから、空間をアプリオリとするカントの考えを批判する議論も存在していた。ベルクソンはそのような思潮を知りながら、空間の理念性というカントの考えをある点までは継承する。本論ではさらに進んで、一般相対性理論における非ユークリッド幾何学の使用を踏まえた現代でも、そうした立場はある程度まで有効であり続けることをも示した。

また、ベルクソンにとってそうした「空間」は知性的思考の基盤でもある。知性的思考とは比較計量する思考であり、そのためには対象を仮想的に切り取り、移動させ、重ね合わせる必要がある。その条件こそが「空間」なのである。また、そうしてすべてを重ね合わせ可能な既知の要素へと分解可能と見なすことで、「同じ原因からは同じ結果が生じる」という法則性の認識、ひいては決定論も可能になる。裏を返せば、持続する実在は相互浸透した連続的多性であり、そうした操作に完全には応じないが故に、決定論にも完全には従わないのである。

第五章ではベルクソンにおける哲学の方法論、彼の言う「直観」理論の検討を行った。彼は認識原理のレベルでは「直観」と「分析」を対置し、直観に「事物の内に入っていき」、「絶対的なもの」を認識する能力を認める。しかし実際の哲学の営みにおいては、むしろ直観の所与を分析するという形で両社が相補的に働くことを認めている。確かに分析は相対的であり事物そのものには到達しないし、言語は空間的本性のものであって持続する実在を十全に表現することはできない。それゆえベルクソンは、哲学者は自らの哲学の核心にある直観を決して言うのに成功しなかったと言うのである。しかしそれでも、学知が成立するためには直観を概念化し、たえず語り直しを続けることが哲学に不可欠である。直観を概念的に表現し、たえず語り直しを続けることは哲学に不可欠でもある。この意味で、哲学的方法のレベルでベルクソンが「直観」について語る時、それはむしろ原理のレベルでは対置されていた直観と分析の協働を意味する。

第二部では『持続と同時性』におけるベルクソンの相対性理論との対決の解明を行った。まず、第六章では歴史的経緯から始めてベルクソンが何を問題にしていたのかを明らかにし、物理学に対する「誤解」には還元されない彼の問題意識とその意義を解明することを目指した。ここでベルクソンが「実在的時間」と「虚構的諸時間」の区別を提唱し、相対性理論によって複数化するのは「虚構的諸時間」だけであると論じるのは、まずもって相対性理論による「双子のパラドックス」の解決の企てであった。

確かに物理学の観点からすればすべては無矛盾な数学的定式に収まるという意味でそこにパラドックスは存在しないが、ベルクソンはそれだけでは満足しない。すなわち、光速に近い速度で宇宙旅行をしてきた人物が地球に帰還した時にどうなるにしても、特殊相対論の記述に従えば、片道の道中ではそれぞれ、宇宙船に乗った旅行者と地球上の人物はともに相手の時間経過を自分よりも遅いと見なしていることは間違いない。ベルクソンはこのような理論の記述がただちに実在に対応していることに異議を唱えるのである。

第七章では、それでもベルクソンの議論にはやはり——少なくとも現在から見れば——実証的に見て間違っている結論への導く記述があることを指摘し、その背景の解明と、ベルクソンの

思考のある方向性を追いながらも、ベルクソン自身の言葉の再現を超えた別の相対性理論解釈の可能性を探求した。

ベルクソンは相対性理論において互いに移動している二つの系を徹底して「相互的」と見なす。それゆえに二つの系ではまったく同じことが起こり、光速に近い速度の宇宙船で宇宙旅行をしてきたポールは地球上のピエールとまったくだけ歳を取るという、今や実験的に支持されない結論を導くように思われる。

それは、ベルクソンが物理学を、幾何学的位置関係の変化たる限りでの運動を扱うものと見なしていることによる。その意味での運動は実際、いずれの物体が静止しておりいずれの物体が動いていると考えても同じであって、まったく相対的である。これはある面で、アインシュタインその人を含む同時代の物理学者たちの問題意識を引き受けたものでもあった。しかし、ベルクソン自身はもちろん「絶対的運動」の実在性を認める。ただしそれはニュートン的絶対空間に基づくものではなく、そもそも幾何学的変化ではない。むしろ宇宙全体の質的な変化なのである。そしてこの主張は、宇宙全体の付置を参照するという点で、運動の相対性を唱えてニュートンを批判し、アインシュタインにも大きな影響を与えたエルンスト・マッハの議論とも接近を見せる。すなわち、ベルクソン的絶対運動と相対論とはたんに対立するのではない。いずれの物体が運動しいずれが静止しているかは相対的であっても、そうした相対的諸関係の総体が絶対運動そのものなのである。

そしてまた、科学も哲学と同じく質的な実在の直観を受け取り、それを分析するものだということも、ベルクソン自身が認めていたことであった。このことを考えるならば、まさにベルクソンの理論に立脚しつつ、ベルクソン自身の考えていた以上に、実在的で絶対的な運動の質的な面を把握する理論として一般相対性理論を評価する可能性も開けてくるのである。

第八章では、一つの実在的時間という『持続と同時性』のベルクソンの主張の意義と射程を明らかにするべく、『創造的進化』の宇宙論的時間論とそれにかかわる諸問題を、現代物理学の見地とも照応しながら検討した。現代ではしばしば特殊相対性理論から「ブロック宇宙」的世界観を導き出すような主張もなされているが、ベルクソンの立場はそれに抗して宇宙全体の時間の実在性を主張する。もちろん彼の議論は相対論に基づいた「ブロック宇宙」論が明確な形で提起されるよりも前のものではあるが、そのような問題意識を読み込むことにより、ただ一つの実在的時間という彼の議論の意味を明らかにすることができるであろう。

また、彼の宇宙論的時間論は熱力学の第二法則という物理学の成果を引証してもいる。実際、この法則はベルクソンのみならず多くの論者が時間の不可逆性との関係で触れてきた主題であり、その中にはもちろん誤解もあったが、本論はその中でのベルクソンの位置とその議論の意義を解明することを目指す。そして、彼の問いの立て方はけっして現代物理学の問い方から遠いものではなく、宇宙全体のエントロピーの小ささの起源というその問題は今なお重要な意味を持ち続けていることを示す。

ただし宇宙の起源と歴史というのは、ビッグバン宇宙論という形で二十世紀に大きな進展を見た分野でもある。そこで最後に、現代物理学の観点を踏まえて今までの時間を空間化する物理

学を批判し、時間の復権を唱えている現代の論者として、哲学者ロベルト・マンガベイラ・アンガーと物理学者リー・スモーリンの自然哲学を参照した。彼らの時間論は物理学の対象たりうる時間であり、ベルクソンの「純粋持続」論とつねに重なるわけではないが、にもかかわらず彼らの論は多くの点でベルクソンと共通するものがあり、ベルクソン的問題意識の現代的継承者と見なすことができるであろう。

こうして明らかにしたベルクソンの実証形而上学の性格からは、それが科学的真理の地位から「神」という問題に至るまで、デカルト主義と対照をなすことが示される。デカルト的神は宇宙の最初にすべての法則を定めて覆すことなく、その連続創造は最初の創造を保存するだけにすぎない。そして誠実さにより、人間がその法則を認識できるようにしてくれる知の保証者である。これに対して、ベルクソン的「創造」は予見不可能な真に新しいものの創造であり、「神」はその源泉である。法則性とは既存のものとその組み合わせについて成り立つものであるが、ベルクソン的宇宙ではそうした法則性をはみ出す新しいものがつねに生じている余地があり、永遠と見なされる法則とは生成する実在に対して知性の構築した近似に過ぎない。

そして科学も、たとえ永遠不変の法則を想定してその探求を目指していても、他方でその実際の営みにおいては、未知のもの、新しい発見を求めるという性格を持っている。すでに決定的な真理を手にしているという独断を離れ、たえず既存の学説を見直しと転覆に晒し、それにより進歩することが科学を科学たらしめる。そしてベルクソン的「実証形而上学」も、対象領域の性格の違いにより科学の場合以上の困難に行き当たるとしても、やはり同様の漸進的進歩を標榜するのである。